

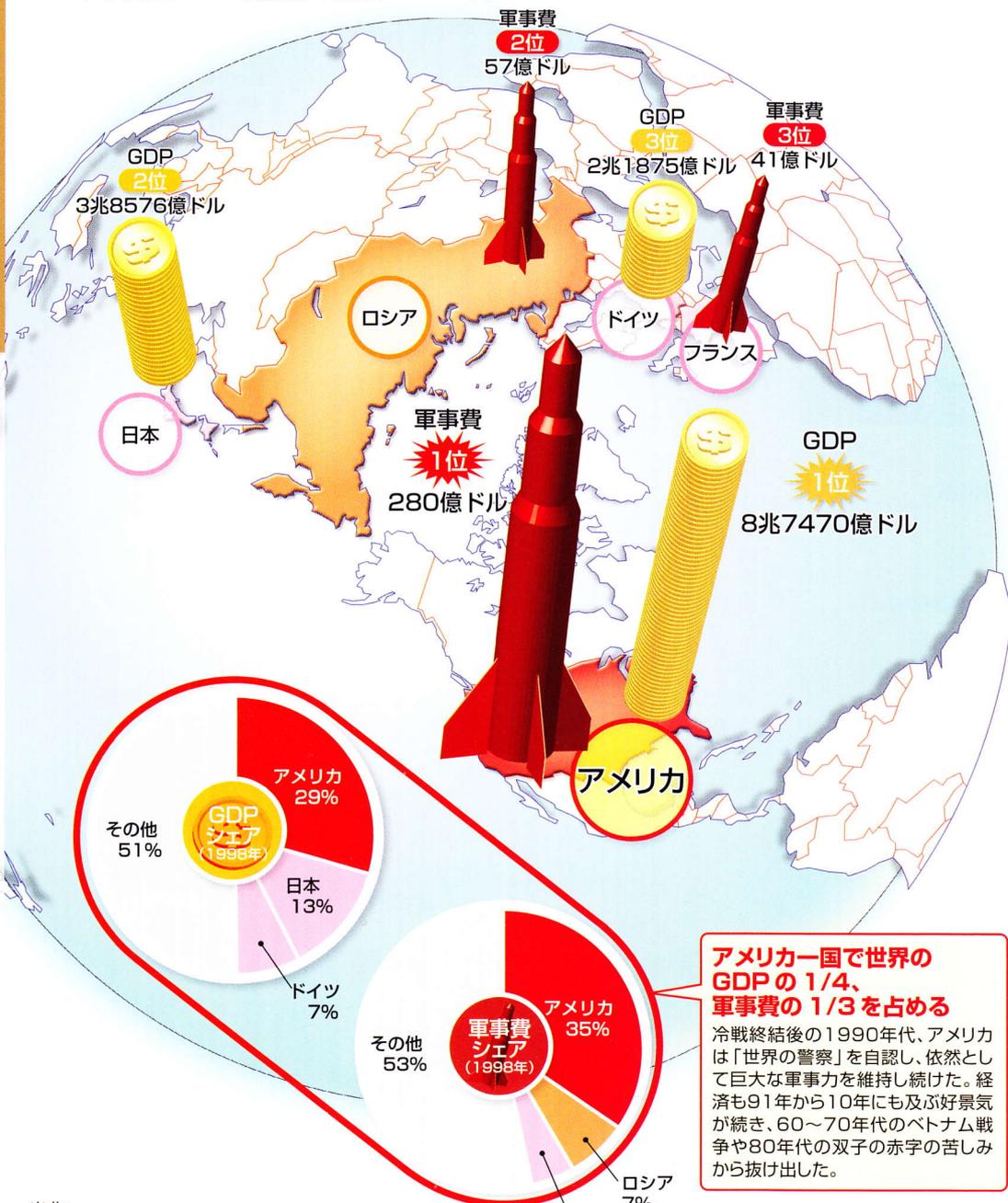
軍事・経済で一人勝ち、唯一の超大国アメリカ



ソ連崩壊で冷戦の勝者となったアメリカは、唯一の超大国となった。軍事・経済で突出した。

突出するアメリカの軍事・経済力

軍事費とGDPの上位3カ国(1998年)



アメリカ一で世界のGDPの1/4、軍事費の1/3を占める

冷戦終結後の1990年代、アメリカは「世界の警察」を自認し、依然として巨大な軍事力を維持し続けた。経済も91年から10年にも及ぶ好景気が続き、60~70年代のベトナム戦争や80年代の双子の赤字の苦しみから抜け出した。

出典: IMF「World Economic Outlook Database, April 2006」
Military Balance「the Military Balance 2000/2001」

アメリカによる一極支配とそのかげり

日本経済の台頭やソ連との熾烈な軍拡競争により、1980年代には貿易収支と財政収支がともに赤字となる「双子の赤字」に苦しめられていたアメリカだが、冷戦が終結した90年代以降は、経済の好調さを取り戻しはじめた。とくに「アメリカ経済の再生」を掲げて大統領に当選したクリントン政権時代(93~2001年)には、インターネットなどの軍事技術を民間転用することにより、IT(情報技術)革命がいち早く進み、マイクロソフトやインテルといったIT関連企業がアメリカ経済をけん引した。こうした状況を背景に財政赤字の縮小にも成功したアメリカは、高失業率に苦しむヨーロッパやバブル崩壊後の日本を尻目に、戦後最長ともいわれる好況期に突入した。

一方、ソ連という最大のライバルがいなくなったことで、軍事面でも唯一の超大国となったアメリカは、世界各地に軍隊を駐留させ、「世界の警察国家」として1990年の湾岸戦争をはじめとする地域紛争に介入し、各地での影響力を強めていった。こうして、90年代を通じて軍事・経済両面で一人勝ちをおさめたアメリカだが、2000年にはITバブルの崩壊により経済成長にかげりがみえはじめた。また、01年に起きたアメリカ同時多発テロ以降は、アフガニスタン攻撃など大規模な対テロ戦争を展開し、再び莫大な双子の赤字を抱えるようになった。さらに、イラク戦争ではドイツ、フランスなど冷戦時代の盟友であった国々がイラク攻撃に反対を表明するなど、アメリカの一極支配に反発する動きが目立つようになっていく。

湾岸戦争

1990年8月、「クウェートは歴史のみてわが国の領土」と主張するイラクが突如クウェートに侵攻。翌91年1月、国連安全保障理事会がイラクに要求した撤退期限を過ぎると、アメリカ軍を中心とする多国籍軍がイラク攻撃を開始し、湾岸戦争が勃発した。多国籍軍の圧倒的な軍事力により、戦争はわずか43日で事実上終結した。